小宮豐隆
和辻哲郎 編集

中勘助全集

第八卷

角川書店

中勘助全集
第八卷

昭和三十六年十一月十五日　初版發行
昭和四十年八月三十日　四版發行

定價一五〇〇圓

著作者　中勘助
發行者　角川源義
印刷者　中内あき子
製本者　鈴木俊一
發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座　東京一九五二〇八番
電話東京（265）七二一一（大代表）

© K. Naka 1961　Printed in Japan
落丁・亂丁本はお替へ致します

目次

樟ケ谷　三

短篇（六）　二九一

遺品　二九三
そば　三一四
深大寺　三一七
晩秋　三二一
雷の太鼓とチャルメラ　お伽話　三二四
七十年　三三一

瑠璃鳥　三三四
たご　三三九
名月　三四一
くひな笛　三四四
戰記と思ひ出　三四〇
舊友　三五五
餅　三七一
辭世　三七四
猫の親子　三七七
るりを飼ふ　三八三
あとがき　三八七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

樟ケ谷

昭和十八年十月十五日

静岡縣安倍郡服織村新間樟ケ谷

悲しい夢をみた。ほんたうに悲しい夢だつた。小石川の家である。姉の最期が迫つてゐる。次の間らしいところだ。蜘蛛膜下の溢血の時のやうに子供みたいな調子でたわいのないことをいつてゐる。父はゐない。末の妹もゐない。兄もゐないらしい。母とふたりの姉とすぐの妹がゐる。そのほか大勢ゐるやうにもありゐないやうにもある。いよいよこれがお別れといふ氣もちで私は胸一杯になり枕もとに坐つて世話をしたり話をしたりしてゐる。姉は別に苦しむ様子もなく目をつぶつたなりうけ答へをする。それだのに私がちよいと目を放したり何かの用でそばを離れたりすると皆は姉を死んだものとして白布をかけて放つておく。後から思へば姉は私がそばにゐない間は本當に死んでたのではないかとも思ふけれど、私がそばへ行けば今にも自分の息がとまるのも知らずに例の無邪氣にものをいふので、私は　これこのとほりまだ生きてるものをなぜそんなむごいことをする　と誠心こめて涙ながらに皆を責めなじる。と、その場は後悔もし、貰ひ泣きもして世話をするらしいが、私が少しでも氣をゆるせばすぐまた姉を屍骸あつかひにして苦しさうな姿勢にしたりする。私は身をふるはせてそれを責める。とも知らずに姉は無心になにかいひつづけてゐる、しづかに無心に。かと思へば私たちは皆外にゐる。葬式のやうでもあるがちつと

も葬式らしい様子がない。私は屍體を左手に枕させるやうに抱へ歩いてゐる、が、誰も見向きもしない様子だ。葬式ではないのだ。でもやはり私は人たちを責める氣もちで一杯で、皆のまへへ行つては非難警告の言葉をあびせてるらしい。それはどこともわからない廣場みたいな所だ。知らない場所の知らない人びとの中だといふことがなにか一層私を悲しませ、また腹立たしくする。私がこれほど姉のために歎いてるのに人びとは全く無關心でゐる。こんな酷薄なことが行はれてるのに人びとは露ほども心にとめない。そのうちふと見れば姉は、屍體は淺黄の無地の著物をきた二十五、六のほつそりと面ながな女になつてゐた。しかも日本髪にゆつてゐる、が、やはり姉なのだ、似てもつかない姿かたちだけれど。私の氣もちは前の姿の時とすこしもかはらずひとすぢにつづいてゐる。姉は横抱きにして歩いてる私が一向苦痛を感じないほど輕い。そのうち私の目は自然に瞼がとぢてきて——あまりに深い悲嘆のためであらうか——わづかにまつ毛のすきまから立つてる人の足先だけしか見られなくなつてしまつた。もう屍體の顔も見ることができない。そのとき不幸にも私の胸に今自分の抱へてるのが果して先ほどからの姉の屍體かしらといふ疑念が湧いてきた。もしさうでないとしたら！　姉の屍體はどこに投げ出されてるのだらう。私は膝から下、裾のへんだけが見える往來の人に抱へてる屍體を見せてそれが姉のかどうかを一所懸命きかうとしてるらしい。けれども彼らにどうしてそれがわからうか。のみならず彼らは悲嘆のためにそれほどまでにうつけた私を嘲笑つてるやうな氣がする。私は途方にくれて誰れ彼の見さか

ひもなくたづねまはつたあげくある建物の前で防空壕かなにかを掘つてる二、三人の勞働者らしい男にきいた。やはり冷かになんの返事もされなかつたらしい。そのうち私は足をふみはづしてまつ暗な穴のなかへ落ちかかつた拍子に目がさめた。明け方だつた。私の腕には姉もなければ、屍體もなかつた。夢は雫のやうに穴の底へ落ちて消えてしまつた。さうして危く現にふみとどまつた私の胸に夢のなかのそれとかはらぬ悲しみばかりが堪へがたく殘つた。

ゆうべの夢は涙にぬれてたけれどけさは秋ばれのすばらしい天氣である。裏の池の鯉をみてるとき生垣の外を流れる用水のふちにしつらへた洗ひ場でしづかに物を洗ふ音がきこえた。私は部屋へかへらうとして口ずさんでた唄をやめ、池の端をとほつて洗ひ場のはうへおりる坂路を庭のはうへ二足三足あがりかけた。そのとき娘さんが後から追ひこしながら誰かしらとふりかへる私に

「おはやうございます」

と口のなかへしまふやうにいつた。すつと姿勢のいいもんぺ姿で、白い洗濯物をもつてゐる。

「おはやう。いいお天氣ですねけふは。出かけないんですか」

町へ裁縫を習ひにゆく。

「ええ、けふは用事があるんで」

といふじぶんにはもうこちらへ背をむけて山の茶畑へほしにいつた。兄さんである主人公も用事

ありげに家にゐる。

私が離れへ歸ると間もなく母屋で餅つきが始まつた。いつてみたら廣い土間に湯氣をたてる蒸籠のそばで兄さんが杵をもち妹さん——先刻の娘さんだ。——がこねどりをしてゐる。農家のうす暗い土間は都會の家の玄關の土間となり、倉庫とも納屋ともなり、時には公開の浴場となり、いろいろの仕事場となる。そこには汗や疲れもあらうかはりにまたかうした單純な淡い樂しみもある。種種な意味で重要な且つ味の深い爐邊とともに都會の家にはさびしく缺けてるところのものである。ただ溫暖なこの地方では萬事寒國におけるほど屋內的、室內的ではないらしい。あすはお日待ちときいたのを忘れてゐた。で、

「お日待ちにはうたつたり踊つたりするんですか」

ときいてみる。

「いいえ、もとはそんなこともしたのですが近頃はやりません」

と兄さんの答へ。

「私がもとゐた農家ではやつたから、お邪魔なら町へ買物にでも出ようかと思つて」

といへば

「時節がらお日待ちもやめようかと思つたのですが」

といふことだつた。東海道の吉原から泊りがけで遊びにきてる姪の秋代ちやんは今までむき出し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

たつた足に新しいもんぺを可愛らしくはいて茶の間のあがりはなに腰かけぶらつかぶらつかやりながらつきたての餅をもつて樂しみさうにたべてゐる。

「秋代ちやん、いいもんぺをはいてるね」

と言葉をかけてもたべるはうに夢中で返事もしない。

部屋へかへつて暫くしたときなにかの用事で母屋の臺所へいつた和子が戻つてきて　こんにやくをつくるところを見てきた　といふ。で、また出かける。まだ臼のそばにゐた兄さんに

「こんにやくの見學にきました」

といひすてて土間を通りぬけ、臺所へいつたら妹さんがこんにやく玉を輪切りにしてゐた。そしてもの珍しく眺める私にそれよりもいつそう珍しく先方から　これを臼でついてこねたのに石灰をいれ蒸してこんにやくにするのだ　と敎へた。ついたままではゑぐいし、とろとろで形もできないのださうだ。石灰のかはりになんとかを使ふ人もあるといつたが耳が遠いので。こんにやく芋はきのふかをととひおぼえた。ひどくのふぞうなもので、土地では茶畑のなかへによきによきと勝手にはやしてゐる。それでどちらにも差支へないものとみえる。このへんでは到る處にこんにやくをうゑ、こんにやくをつくる。ぷりぷりと硬くてうまい。こんにやくといへばへんな物だが副食物としては一般都會人にも充分親しみがある。殊にしらたきは鍋ものにはなくてならぬ。にもかかはらず——序をもつて廣く食趣味についていへば、食料を製品半製品の形で受取ること

が多く、それらの造り方をしらず、造らず、造る便宜をもたない都會人の趣味は兎角舌端の味覺にとどまつて、漁獵は暫くおき、その育成や製造工程、技術手腕にいそしみ、遊び、樂しむといふ幅と奥行がない。これまた都會のたぶんは餘儀ない貧しさ、さびしさである。そこへ兄さんがはひつてきて　軍需工場ではこの三分の一ぐらゐの厚さに切つてどうとかして澱粉もとるし飛行機の翼の塗料にもする　と補足的說明を加へた。私は

「田舍へきていろいろ學問をします。ありがたう」

といつて部屋へ歸つた。

午後。上り口の障子のそとで「旦那さん」としづかに呼ぶ聲がするのであけたら一夫さん――主人公――が立つてゐた。きのふのことだ。私は庭をへだてた向うの納屋のまへで太い靑竹を割り雨樋をこしらへてる一夫さんのそばへいつて「あなたは重砲兵でしたつけね」と話しかけた。そしてかねて自分の詩の材料にしたマレー半島のある所での慘澹たる砲兵戰をしるした新聞の切拔きに使つてある砲兵科の術語についての疑問をただしてみた。一夫さんは敎へてくれたがそれだけで滿足せず、親切にもけふになつてわざわざなほ意見を述べにきたのだつた。そして砲兵操典を出し「こことここをごらんなさい」としるしをした個所を示していつた。後刻母屋へ操典を返しにいつたとき私は

「あなたの戰つたのはシンガポールでしたつけね」

とたづねた。

「いえシンガポールへは行きませんでしたがシンゴラへ上陸してマレーをずつとやりました」

「ぢやそのへんのことを書いたのをお目にかけませう」

といつて別れた。いくつかの戰爭の詩だ。後でわかつたことだが、一夫さんは六年間？　出征して北支から山西省？　それからまだどの邊かにもゐて、最後にマレーで負傷し、シンガポールへは行かれずにしまつたのだ。退院してまだいくらも日がたたないらしい。砲兵軍曹？　二十七、八か。痩せぎすで背が高く、姿勢のいい、おとなしやかな紅顏の青年である。

日がくれてから石上さんのいちばん上と三番めのお孃さんがもんぺ姿に大籠を背負つて粗朶と薪をもつてきてくだすつた。百姓――農業――に興味をもつてやつてるといふ石上さんの話だつたが、愉快にも賴もしいお孃さんたちではある。安西で買つた小さな釜と竈がきのふ通りがかりの歸りの馬力屋さんに托されて夕刻田圃のむかうの縣道のはたの家まで屆けられた。その家から知らせてくれたので行つて和子は釜を、私は竈を背負つてきた。こちらでは知らない人たちだけれど田舍のことで遠くはなれてゐてもむかう同士は知合ひなのだ。和子は飯をたいてみてたいへん時間の經濟にもなるといつて得意でゐる。

十六日

萬年筆のインキがきれた。あき壜は夕がた屆くはずの荷物のなかにある。それをもつてはるばる町まで買ひに行かねばならない。田舍と戰爭の悲哀である。で、それまでの凌ぎに石上さんへインキを貰ひにゆく。けふは曇りで涼しいし——十月半ばでありながらこの邊の日ざしは東京人の私にはきつすぎる。——歩き馴れてインキ一つのための往復半道足らずをさまでに思はなくなつた。かうして土地に馴染んでゆくのだ。門前を流れる用水にかかつた橋を渡り、生垣の間を細く廻つたたたきの坂道をのぼつて石上さんの臺所へはひつたらあの朴訥らしい女中さんが當惑顏で

「けふも山へいつてお留守です。呼んできませう」

と行きかける。きのふも郵便局の歸りによつたら裏の山へ行つて留守だつた。草刈りだらう。そこへ里子さん——いちばん上——が出てきてれいの見るから氣もちのいい健康明朗な笑顏で迎へた。

「昨晩はどうも。けふは御無心があつてきました」

と用件を話し

「まあどうぞ」

と上へすすめるのを

「ここで結構です」

と茶の間の上り口の縁に腰をおろさうとしたが米の粉らしいものがちらばつてるのでかけるところを捜してる間に奥からインキの一杯はひつた壜をもつてきて

「澤山ありますからおもちください」

といふ。

「またなくなつたら頂きます」

と土間にしやがんで萬年筆へインキをいれる。私がきたとき里子さんはそこに腰かけて笊の生栗をむいてたらしい。やはりお日待ちのためゆでるか栗飯でもたくのだらう。里子さんも

「ぢきによんでまゐりますから」

と裏山へ行きさうにするのを

「いいえ私も忙しいから」

と歸りかければ、手早く用意した綺麗な風呂敷に手製のこんにやくを小鉢に一杯包んでくださる。お日待ちにはこんにやくをつくる習ひなのかもしれない。これもお日待ちのためにやることか農家ではさばさばと障子をはりかへた。新しい障子紙に日が白じろとあたつてるのは嬉しい田園の風情である。この村がはとり――服織――であるやうに靜岡の郊外には麻機、賤機などの地名もあつて古く織物に緣故があるばかりでなく、今はどうか、私どもには親しみのある駿河半紙の名もあるくらゐで、この邊紙すきにも無緣ではなかつたとかきく。家へ歸つて「東京へんの家より

よつぽど障子が綺麗だ」といつて和子と笑ふ。さうして栗毛の駒のやうな健康な肌色をし、目千兩ならぬ笑顔千兩の里子さんをほめそやす和子にやんやと同感する。

おばあさんはむかうの納屋のまへに筵をしいてはす芋の皮をむいてゐる。農家の年寄は家の者が働きに出たあと留守番がてら繕ひ物をするとか、孫のもりをするとか、一日ぢゆう手をあけることなく自分の年と健康にふさはしい仕事をしてゐる。おばあさんは八十前後らしい。

「百姓はやるせないもんだよ。それからそれと働かなきやならない」

と愚癡らしくいふけれど、私からみればそれはさうでもあるが、また日に月に徐ろにくりひろげられる自然の繪卷物を言葉どほり身をもつて描くことであり、季節的に柄や色彩のかはつてゆく田園の織物を梭やふみ木のかはりに鋤や鍬をもつて織つてゆくことでもある。それにこの藥科川の沿岸は耕地が狹く、石が多く、土が硬いのはいけないにしても、氣候は溫暖で裏作がきき、水も概して豐富であるうへに傾斜地には蜜柑と茶といふ有利な產物があり、山間には椎茸がよく出來、輸出には清水港が目と鼻の間にあるなど、半年ぢかくも耕地を離れねばならぬ雪國や年中水びたしの沼澤地の濕田帶などに比べればまづ惠まれてるといふべきであらう。達者なおばあさんもさすがに夜は早く寢るとみえて私が風呂をもらひにゆくじぶんにはまだふけてもゐないのに茶の間に姿がみえない。これもお日待ちだからだらう、はめ一重隣りの納屋からもちだされた割合大きな太鼓を秋代ちやんがドコドコ叩きまはつてゐる。きり餅をもらつたので晝飯に燒いてたべ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb